

朝鮮半島の緊張と日本

社説

一 一 立てている事実は否定できない。

インドシナ戦争 インドシナ情勢の急激な変化 決着後のアジア情勢は、たしかにアジアにおける大勢の中で、朝鮮半島の力のバランスが崩れたこと島をめぐる緊張を意味し、次の紛争地点はどこ

張が一つの焦点 狭い海峡をへた アジアに注がれつつある。その一つが朝鮮半島であり、またタイ 生じた場合、わが国がそれに巻き込まれぬかという国民の不安を反映し、先の衆参両院予算委員会の安保論議でも、その大半の時間が朝鮮問題を費やされた。一方、米国内でも、このところシミュレーション国防長官らによつて、韓国防衛に核使用も辞さないなど、かなりと重しい発言が相次いで行われてい

る。それが、わが国内の朝鮮半島や安保をめぐる論議を増幅するに思われる。

緊張を生んだ最大の理由 は、カンボジアに次いで南ベトナムと、その長いテロ入れを繰り返してきた米国の撤収が行われた結果、同盟諸国の米国に対する不安と不信が急に高まったためであり、韓国はいづまでもな

二 しかし、問題はただそれだけではない。ベトナム情勢の急変以後、朝鮮人民民主主義共和国(北朝鮮)の金日成主席が十数年ぶりに北京を訪問し、熱烈な歓迎を受けて首脳会議の共同コミニステを發表している。この訪問の口実、金主席の武力による朝鮮統一も辞さないとの激しい演説内容が伝えられ、それが韓国の緊張をいっよ

に高める結果になった。また、韓国の朴政府は、南北朝鮮の休戦ライン付近の地下五十分、北による幾本ものトンネルが発見されたと発表しており、それが北朝鮮の韓国への武力侵入の意図を具体的に示すものとして、国内の警戒体制をしくにいたった。韓国の国会が野党の全員一致で非常事態の決議をしたのも、主としてこのためだ。

う。 朝鮮半島のこうした情勢に対する日本政府の考え方は、国連軍の解体決定以降、それに代わるべき安全保障のわく組みを作り出す努力をするに、焦点がおかれているようだが、韓国・北朝鮮の国連同時加盟や日米中ソなど周辺諸国による南北同時承認の推進などがその方策としてあげられている。

三 このみれば、朝鮮半島の緊張とはいえ、事態はその力の均衡に大きな変化はなく、むしろ中についてみれば、中国側が「平和的手段による朝鮮統一」を強調し、金主席に韓国との武力解放を断念するを強得したとも伝えられ、北朝鮮と当面そうした考えのないことを示唆している。きつ敵い対立関係にても、相互防衛条約によつて米軍はなお韓国に駐留するものと思われ、それを承認し北が南進の危険をおかすとは考えにく

い。 今秋の国連総会では韓国連章も、そうした地道な努力により「民族自決の原則に基つた統一の悲願を達成できる国際環境づくり」こそわが国の忘れてはならぬ課題といえる。